名古屋市社会科同好会

同好会ひろば

第２８５号
R3．3．12
No.5

１年間の活動を振り返って

今年度は、「共に学び、語り合う同好会活動を目指して」をテーマに、会員が、今よりもさらに授業力が高まった、今よりも人とのつながりが広がったと思えるような同好会活動を進めていきたいと考えました。そのために、「共に学ぶ場をつくる工夫」と「仲間の輪を広げる工夫」を重視し、活動を進める予定でありましたが、新型コロナウィルス感染症の影響が大きく、活動内容を見直し、進めてまいりました。

<研究活動を振り返って>

今年度は、全中社研名古屋大会を見据え、現代社会が抱える今日的な課題に対して、社会の一員としての自覚をもったり、今後の社会の在り方に関心をもち、その形成に携わろうとしたりする子どもの姿を目指して、研究活動に取り組み、小中連携を図れるように、小学校も学年ではなく分野ごとに推進部会を設けました。

コロナ禍における部会の在り方として、オンライン会議システムを活用した小学校部会、各推進部会を行いました。オンライン会議システムの使用には機器トラブルや資料提示、小グループでの意見交換が難しいなどの課題はありましたが、働き方改革という点でも大きな一歩を踏み出すことができたのではないかと考えています。

<研修活動を振り返って>

授業づくり講座は、会場に集まることはできませんでしたが、講師の先生が作成した資料を若手会員に配布し、授業力向上に役立ててもらえるようにしました。授業力アップ研修グループやステップアップ研修では、若手会員がメールや電話で指導者と連絡を取り合い、授業力向上のために指導を受ける体制をとることができました。6年目までの会員にはグループ研修、7年目以上の会員には個人研修というスタイルを取り入れて3年目となりましたが、多くの会員にこの形が浸透してきたと感じています。

今後も、より多くの会員が社会科の授業力を高められるように、様々な研修活動を工夫していきたいと考えています。

会員の皆様が、それぞれの立場で社会科教師としての力量を向上させることができるよう、事務局員 12 名で同好会活動を推進してまいりました。至らない点も数多くあったとは思いますが、一年間、お支えいただいたことに深く感謝申し上げます。

（名古屋市社会科同好会事務局長 高見小学校 大西 大介）

【第２８５号　紙面】

１年間を振り返って・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ｐ１）
社会科同好会全体会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ｐ２・ｐ３）
ステップアップ全体会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ｐ４）
小・中学校合同部会研究発表会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ｐ４）
授業づくり講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ｐ５）
日々雑感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ｐ６）
年度末アンケートより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ｐ６）

社会科同好会　全体会

2月10日(水)、オンライン会議システム「Zoom（ズーム）」を用いた社会科同好会全体会を行いました。社会科同好会会長の那須義高先生、名古屋市小中学校長会社会科部会長の相川保敏先生、社会科研究会委員長の植村宏明先生にご挨拶をいただきました。

＜社会科同好会会長 吹上小学校長 那須 義高 先生＞

社会科教師に期待される専門性は、何でしょうか。音楽や体育などの指導者には、技能の指導法や技術の専門性が期待されます。社会科教師にとっても、地図や絵図、年表や統計資料などの読み取り方の指導法や、調べたことや考えたことを分かりやすく表現できるようにする指導法は、もちろん大切です。しかし、内容教科である社会科の命は、学習内容である教材です。教材に対する深い理解と解釈、鋭い取り上げ方において、社会科教師としての真価が発揮されます。

私が教材開発において力を入れてきたことは、子どもと教材づくりをすることです。9年目に5年生を担任したとき、現場主義にこだわり、自分だけでなく、子どもたちにも現地取材、電話取材に取り組ませました。学校で取材計画を立て、休日などを利用して、子どもだけのグループで、近くの農地や県内の漁港など様々な場所でのフィールドワークに取り組ませる、このようなことを1年間続けました。今では、難しい取組ではありますが、子どもが集めた生の資料で授業を進める、まさに自力解決を目指す実践であったと思います。ときには、私が知らない生産者の悩みを聞き取ってきたり、現地で手に入れた実物や映像を追究活動に役立てたりすることもありました。調べた内容やつくった資料が稚拙であったり、不十分なものであったりもしましたが、五感を総動員してつかんだリアリティに勝るものはなかったのです。その後も、子どもと共に教材研究を進めていったのですが、自分には不十分なところがありました。それは「発問」です

「教材にどのように向き合わせるか」「どうすれば子どもが自ら動き出すか」これらを吟味した発問が、教材開発の根幹であると思います。当時の実践を振り返ってみると、「漁場が狭くなった中で、どのように生産量を増やしたのか」や「電話の秘密を探ろう」など、漠然として魅力や迫力に欠ける発問ばかりです。理想の発問は、有田和正先生の「バスの運転手は、どこを見て運転しているのでしょう」です。これは、「Ａさせたかったら Ｂと言え」の真髄であると思います。子どもの意識を視覚化して、多様な意見を引き出し、知的好奇心を高めて、自ら確かめに行くという行動を促す。子どもが授業の目標である Ａ をつかむために、リアリティある現実と自ら向き合うとする Ｂ を見つけることが発問の鍵であると思います。

一方で、リアリティということに関して考えが揺らぎ始めています。ダーウィンの言葉に「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない。唯一生き残ることができるのは、変化できる者である」 というものがあります。Society5.0の世界を生きていく子どもたちにとって、リアリティがあり、突き動かされる原動力となる現実、向き合っていく社会的事象は、今までとは別のものになるのではないか。リアリティのあるものとは、実際に見聞でき、手に触れられるものだけではないのかもしれません。今後、現場や実物に直面しなくても、的確な判断が求められる、さらにスピーディーな世の中になるのかもしれません。先生方には、常にアンテナを高くし、変化に対応でき、柔軟な発想ができる社会科教師として活躍されることを期待しています。

＜名古屋市小中学校長会社会科部会長 白鳥小学校長 相川 保敏 先生＞

社会科の教師は、「子どもたちが時間を惜しんで探究し続ける授業をしたい」と日々思っていると思います。しかし、実際にはなかなかうまくいきません。一方で、子どもたちが時間を惜しんで取り組み続けるものにゲームがあります。魅力ある良質なゲームには、子どもたちが夢中になるどんな仕掛けがあるのでしょうか。

まず、目標の階層構造があります。ゲームには、ボスを倒すというような究極のクリア条件（大目標）が提示されます。その一方で、目の前の敵を倒すというような小さな努力で達成できる目標（小目標）が設定されています。さらに、一つの街の敵を全員倒すと次のステージ(街)に行けるというような中目標も設定されています。そして、次にどの街に行くのかプレーヤーが選択できるようになっています。このように、ゲームには大・中・小の目標があり、目標の一部が選択できるように設定されています。また、目標の数にも工夫があり、大目標一つに対して、中目標三つ。一つの中目標に対して、小目標七つ。つまり1×3×7の目標設定がされていることも特色です。

こうした良質のゲームの特性を社会科の学習に当てはめてみたらどうでしょう。ゲームの目標は、社会科では学習問題にあたると考えます。そこで、大単元の学習問題を大目標、小単元の学習問題を中目標、授業のめあてを小目標と置き換えて、ゲームの目標構造の1×3×7の構成で考えていくとどうなるでしょうか。一つの大単元を三つの小単元で構成し、それぞれの小単元を7時間程度の授業で構成すれば、21時間完了でゲームと同じ構造の大単元をつくることができます。

これまでの社会科の実践では、授業のめあてを解決していくと小単元の学習問題(中目標)が解決できるような授業づくりがよく行われてきました。そして、この学習問題の設定に力を注ぎ、小単元で完結する学習計画をよく立ててきました。良質のゲームのように小単元同士の配列や選択の自由、そして大単元の学習問題を究極の目標として位置付けることはあまり考えてきませんでした。ゲームのような大単元を構想していけば、子どもたちにとって魅力ある社会科の学習を構築していくことができるかもしれません。この他にも、良質のゲームには初めに楽しい経験をさせたり、プレーヤーに合わせて少しずつ難度を上げていったりするような工夫がされています。社会科ではこうした手法はあまり取り入れていませんが、算数では問題の配列が簡単な問題を解いてから、少し難しい問題を解いていくようになっています。算数が 8 年連続で好きな教科第一位になっている理由かもしれません。

社会科の教師として、これまでの概念にとらわれず、子どもたちが夢中になる社会科の授業を一つでも多く創っていただき、そして子どもたちの好きな教科第一位に社会科が選ばれることを祈念しています。

＜名古屋市社会科研究会委員長 植村 宏明 先生＞

本年度、新型コロナウィルス感染症の影響で会を思うように開くことができませんでした。しかし、同好会の原点は、授業力の向上、そして人とのつながりをつくることにあると思います。メールやリモートでできること、会って話すこと、それぞれのよさがあると思います。これまでの同好会活動のよさを残しつつ、新しい時代の同好会活動が推進されることを期待しています。そのためには、同好会会員の一人一人が、それぞれの立場から知恵を出し合い、同好会活動に関わっていくことを期待しています。

ステップアップ研修全体会について

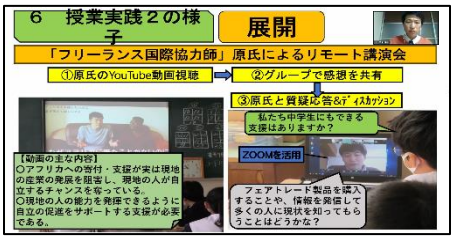
今年度も、授業づくりや論文作成の楽しさを見いだしたり、積極的に指導者と関わり、会員相互のより強いつながりを形成したりするため、ステップアップ研修を行いました。3年目の今年度は、電話やメールを活用しながら、指導者に進んで指導を仰ぐ受講者が多く、社会科の授業づくりについて学びたい、体験記録などの論文を書きたいなど、目的意識をもって参加する姿が多く見られました。また、コロナ禍でも、受講者と指導者がともに学ぶことができるように、1月29日（金）には、ステップアップ研修全体会をオンライン会議システムによって行いました。本研修会では、提出された体験記録について、以下の5名の先生方に、テーマや手だて、実践の様子を紹介していただきました。

【稲永小学校　夏目　郁馬　先生】
「主体的に学びを進めることができる子どもの育成
　～個別化・協同化・プロジェクト化した社会科学習～」

【比良西小学校　中村　翔　先生】
「子どもたちが、学ぶことを楽しさと実感できる授業を求めて
　～『今』できる最大限の授業づくりの模索～」

【稲生小学校　藤山　貴伸　先生】
「自分の住むまちに愛着をもつ児童を目指して
　～アリの目とトンビの目で見るマッピングと地域の人々との出会いを通して～」

【宮中学校　児玉　和優　先生】
「疑問や興味を基に設定したテーマを
　主体的に探究する生徒が育つ社会科学習」



【沢上中学校　加藤　優太　先生】
「社会や仲間と“つながる”社会科学習」

ステップアップ研修全体会を通して、互いの実践の成果を共有したり、刺激を受けたりしたことで、今後の実践意欲を高めることができました。来年度以降も、自身の力量を向上させたいという同好会会員の皆様をサポートしていきたいと考えております。ぜひ皆様のご参加をお待ちしております。

小・中学校合同部会研究発表会について

1月12日（火）、オンライン会議システム「Zoom（ズーム）」を用いた小・中学校合同部会研究発表会を行いました。本年度は、令和4年度に開催される全中社研名古屋大会の理論を踏まえ、「人間の生き方を問い続ける社会科学習」を研究主題として、学習段階の在り方や教材化の工夫に焦点を当てた研究を進めてきました。各分野の推進グループが1年間の実践の発表を通して、実践の成果と課題を共有しました。また、推進グループ全体で全中社研理論について学びを深めました。

<全中社の理論について>　名古屋市社会科研究会役員　はとり中学校　牧原　晃先生

地理的分野では、地域的特色を捉えた上で、各地域が発展してきた理由と課題を克服してきた経緯から、「よりよい社会とするために大切なことはなんだろう」ということを考え、蓄積させていく。

歴史的分野では、歴史的事象を理解した上で、その時代に生きた人の思いや願いを捉え、各時代から、よりよい社会を築くために欠かせない普遍的な思いや願いを蓄積させていく。

そして最終的に、地理・歴史の学習を経て公民の学習につなげていきたい。公民的分野では、「これからの未来につなげていける発展の要素、解決の糸口、人々の思いや願いを生かした上で、現代の様々な課題を解決しよう」このような学習をしていきたいと考えています。

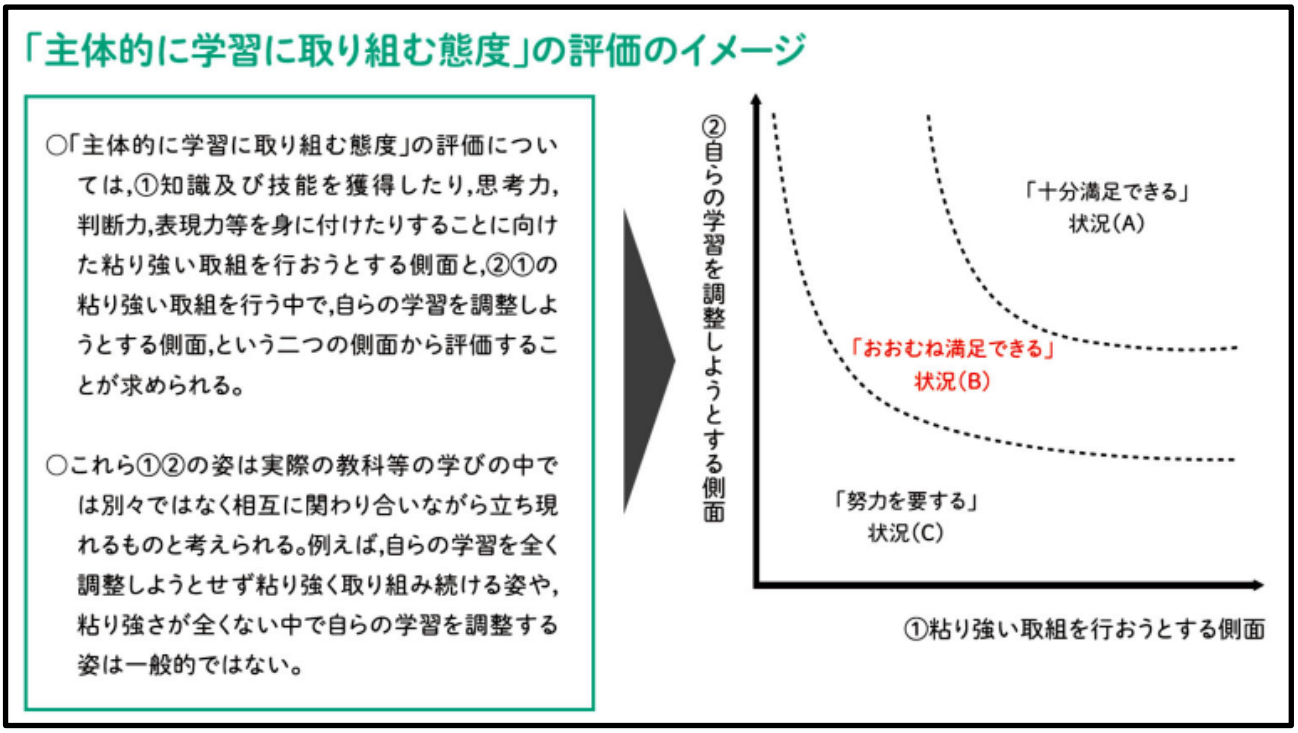
授業づくり講座について

今年度も、「すぐに使える」「実際の授業をイメージできる」という点に重きを置き、「授業づくり講座」を計画しました。第３回は、１月22日（金）に開催予定でしたが、新型コロナウィルス感染症の拡大防止の観点から、開催を見送りました。そのため今回は、第３回の授業づくり講座において、講師の方から説明していただく予定であった社会科の授業づくりについて紹介します。

【中学校】講師：守山西中学校　関　真輔　先生

☆　来年度からの「学習評価」について

今回の学習指導要領では、これまでの評価「関心・意欲・態度」が、「主体的に学習に取り組む態度」となりました。これは主体的に学び続けることが重要視されていることを裏付けています。これを評価するには、内容のまとまり（単元等）の中で、自分の学習状況を把握し、学習の進め方について自ら学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかを、振り返らせる活動が必要となります。また（下図）のように、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身につけたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面と、②　①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面という二面を評価することが求められています。



そこで、社会科における評価の観点別の趣旨を確認すると･･･

①　知識・技能は、〇〇を理解しているとともに、〇〇を調べまとめている。

②　思考・判断・表現は、〇〇に着目して、多面的・多角的に考察したり、〇〇を説明したり、議論したりしている。

③　主体的に学習に取り組む態度については、よりよい社会の実現を視野に〇〇を主体的に追究、解決しようとしている。（公民的分野だけは、主体的に関わろうとしている）と書かれています。

これにあてはめて、〇〇を「内容のまとまり」や「単元」等で考えていくことが必要となります。

※　今回の本資料は、「指導と評価の一体化」のための学習調査に関する参考資料、「学習評価の在り方ハンドブック」（ともに国立教育政策研究所）から引用しております。詳しくはホームページでご覧ください。

日々雑感

鶴舞小学校 教頭　一ノ瀬　喜崇　先生

昨年３月までの３年間、学校・社会教育における人権教育に携わってきました。人権教育では、学習者が相互の気付きや知識を出し合い、新たな気付きを発見していくことをねらいとした学習プログラムが数多く開発されています。その中の１つを紹介します。「宇宙人との交信」という学習プログラムです。

> 20XX 年、人類の科学技術が発達し、銀河系のはるか遠く離れた宇宙人との交信に成功しました。しかし交信できるのは音声のみで、映像は送ることができません。人間とは姿形も社会も異なる宇宙人に、「人間」をどのように説明したらよいでしょうか。

みなさんだったら、どのように説明しますか。私が、学習者として、この学習プログラムに初めて参加したときのことです。参加者からは「二本足で直立歩行をし、地球上でもっとも知能の発達した生物」「様々な道具を使うことができる生物」「男性と女性がいる」などの意見が出されました。意見が集約されたホワイトボードを眺め、改めて参加者同士で振り返っていると、参加者から出された「人間」の説明では、障がい者、子ども、性的マイノリティなど、当てはまらない人たちがいる……私たちが、無意識に「人間」を定義する「輪」を狭めていたことに気付かされた瞬間でした。人として幸せに生きていくために全ての人がもっている権利である人権。「人間」を定義する「輪」が狭ければ、人権が大切にされない人たちが出てきます。この学習プログラムを通し、共に社会生活を営む様々な立場の存在に気付き、自分の中にある「人間」を定義する「輪」を広くすることの大切さを学びました。これは、公民的資質を養う社会科の学習においても大切なことだと思います。

最近、人権問題に関わる支援団体の方から、「コロナ禍のような非常時だと、マイノリティの人たちが抱える問題が置き去りになってしまう」というお話を聞きました。長引くコロナ禍。共に生きる人々の問題に気付くアンテナを高くもつことができているか。自分の中にある「輪」が狭まっていないか。改めて、自分を見つめ直しています。

～年度末アンケートより～

たくさんの会員の方々から年度末アンケートへのご協力をいただきました。ありがとうございました。ここでは、その一部を紹介させていただきます。

- ○　Zoom については、小学校部会や中学校部会においても、2月全体会のように Zoom ID やパスコードを伝えて、広く参加を求めていただくと興味のある方がもっとアクセスできると思います。
- ○　Zoom での研修会がもっとあると助かります。同好会での学びの機会がもっと増えると助かります。
- ○　研究に関する話し合いや議論、質疑応答は対面の方がしやすいと感じました。説明や講義形式の内容は Zoom の方が良いと感じたので、今後もよろしくお願いします。
- ○　可能な限り、Zoom を活用した会議を行ってほしい。小学校部会における推進グループでは、中学校の研究主題を踏まえつつ、小学校にあった実践が柔軟に行えるようにしてほしいと思います。（4段階の単元構造等）